

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 庭園部会（第33回）

議事録

日時 令和5年2月24日（月）14:00～15:35

場所 西の丸会議室

出席者

構成員			
丸山 宏	名城大学名誉教授	座長	
仲 隆裕	京都芸術大学教授	副座長	
栗野 隆	東京農業大学教授		

オブザーバー

野村 勘治	有限会社野村庭園研究所
白根 孝胤	中京大学教授

事務局

観光文化交流局名古屋城総合事務所
教育委員会生涯学習部文化財保護室

議題 北園池護岸修復等北側石組について

配布資料 特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 庭園部会（第33回）資料

事務局	<p>1 開会</p> <p>2 あいさつ</p> <p>年度末の大変ご多忙の中、ご参加いただきありがとうございます。また、会議後のご視察は、足下の悪い中ですが、よろしく願いいたします。本日の議事は、北園池の護岸修復等北側石組について、発掘調査の結果等をふまえた園路の位置、関連の石組みを検討した内容となります。限られた時間ではありますが、忌憚のないご意見を頂戴できればと思っております。</p> <p>3 構成員、事務局、オブザーバーの紹介</p> <p>4 今回の議事内容</p> <p>資料の確認をいたします。会議次第、出席者名簿、資料1がA3で3枚です。また、本日の議論の参考にご覧いただけるように、過去に行った発掘調査の写真等を机上に置いております。適宜ご覧ください。</p> <p>では早速、議事に移ります。ここからの進行は、丸山座長にお願いいたします。</p>
	<p>5 議事</p> <p>北園池護岸修復等北側石組について</p>
丸山座長	<p>それでは資料について事務局が説明されたあと、皆様からご意見を伺いたいと思います。野村さんが作成した資料がありますので、あわせて説明をお願いします。</p>
事務局	<p>北園池護岸修復等北側石組について、ご説明します。まず、1. 経緯等です。北園池の北側の石組の復元、図1の赤い丸の中になります。過年度調査等から、絵図で示しているルートについて、図2のオルソ画像で3案が考えられました。</p> <p>具体的には、案1については、石Aおよび石Bの北側を通る案。案2については、同じ北側を通りますが、遺構面が低い、園路勾配が緩やかである案。案3が、石A、石Bの南側を通る案です。</p> <p>過年度の調査では、園路に関する遺構は確認されておらず、図2オルソ画像の石A、Bの北側は調査がされていませんでした。そこで調査区、図2の黒い線で囲われた①②を設定し、園路遺構、近世の遺構面、石の据付を確認しました。</p> <p>発掘調査結果について、概要をご説明します。参考資料をあわせてご覧ください。まず、調査区1についてです。基本土層は、上から表土、権現山整備に伴う造成土、現代層、近世層となっています。現代層より下層は、近代以降の遺物が出土しなかったため、近世層と判断しました。</p>

近世層の直上が現代層となることから、近世面が削られている可能性があるかと思っています。近世層の最下層では、調査区1、池の護岸背面を調査した調査区があり、そこで検出した灰色っぽい砂質土と同様の土を確認しました。池、もしくは権現山に伴う盛土と考えています。掘削は、景石の下端まで試みましたが、安全上の限界に達したこと、基盤となる灰色の砂質土を検出したので、それ以上の掘削は行っていません。石Aや石Dは、文政期以前の可能性のある層、灰色っぽい砂質土等を掘り込んで、近世層中に据えられているので、原位置を保っているのではないかと判断しました。明確な園路遺構は確認できませんでした。石Bについては、参考資料に過去の調査の図面を載せています。石Bについては、背面土の3分の2が表土であると判断し、この形状の石が背面土なしに安定していたとは考えにくいので、近世に据えられた石ではないと判断しました。土留めとして、近代以降に置かれた可能性があると考えています。

続いて、調査区2についてです。基本土層としては、表土、現代層、近代層、近世層となります。過去の調査で検出したタタキは、北側では確認できませんでした。タタキより北側は、近代以降の掘り込みがあり、近世面は壁際の一部で確認できたのみです。石C直下の土からレンガが出土したこと、タタキと密着する石Eに石Cが被ることから、石Cは原位置ではないと判断しました。調査成果については以上です。

続いて2ページ、3園路の検討です。(1)根拠として、2つ考えられました。アの検出遺構とイの絵図に分けています。

まず過年度発掘調査による検出遺構についてです。北園池の発掘調査については、平成28年度と平成29年度、今年度を実施しています。成果については、平成28年度、29年度分については報告書にまとめられており、概要は表1のとおりです。まず、平成28年度については、北園池の東で池跡、亀を模した造形のタタキ、中島、半島状の地形等が成果としてありました。平成29年度は北園池、池底タタキ、柱の礎石等が遺構として検出されています。

イの絵図です。2点あり、御城御庭絵図、尾二ノ丸御庭之図となります。御城御庭絵図については、保存管理の指標と位置付けた絵図であり、調査および整備の基本となります。過去の検証から縮尺、距離感是不正確であり、描かれていない要素が存在した可能性はありますが、描かれた要素については概ね文政期以降における二之丸庭園の実態を反映していると考えられます。尾二ノ丸御庭之図については、御城御庭絵図と異なる箇所が見られるので、2つの絵図を比較検証することで、より考察を深めることが可能になります。

(2)園路の検証です。調査前に推定した案2は、石A、Bの北側を通る遺構面が低い案です。こちらについては、2発掘調査結果を受けて判断した近世層の位置から、その可能性は極めて少ないと考えています。案3は石A、Bの南側を通る案になります。こちらについては、石Bが近世に据えられた石ではないと判断したことから、石Bの上を通る可能性、案3として図5の青の破線が考えられました。

図3および図4の絵図に描かれた半島状地形、石列、中島等が、実際に図5の検出遺構でも確認ができています。図3および図4の園路、赤破線の部分については、権現山に架かる橋の下から池の護岸沿い、そして半島状の地形の北側を通過して沢飛石に至りますが、遺構保護のため、図5の石Bを動かすことなく案3の赤破線で園路整備をした場合、その

	<p>幅員が石Bの南側で50cm程度となり、通行が難しい状況になります。以上から、石A、Bの北側を通る案1、石Aの南側直近を通る案3'の青破線、この2つの案に絞られました。</p> <p>3ページをご覧ください。4整備案です。先ほどの検討、3および遺構保護のために石Aから石Dまでを現在の位置とすることをふまえ、案1、石A、Bの北側を通ることを念頭に整備案を検討しています。左上が立面図です。その下に、使用石材、大きさを①番から⑱番まで記載しています。左上、図7が平面図です。左下が、石組の案について御城御庭絵図ではどの番号に該当するかを記載しています。右下が、オルソ画像に石組、石材の位置を示したものになります。</p> <p>続きまして、現時点での野村先生の整備案をご解説いただきたいと思っております。この度、野村先生には、発掘調査やその検証と並行してご検討いただいております。我々がご提供できる情報が十分でない中で、整備案をお考えいただいております。ご解説等よろしくお願いたします。</p>
野村オブザーバー	<p>概要は、先ほど事務局からご説明されたとおりです。皆さんの手元に参考として、私が描いた整備案等がありますのでご覧ください。</p> <p>まず、北園池護岸修復のイメージ図です。御城御庭絵図はどちらかという設計図、尾二ノ丸御庭之図はいわゆる竣工後の図ではないかと言われているが、それぞれを見てトレースしたものになります。ちょっと反復し難い部分もあるので、そういう意味では描いて理解するというか。例えば、参考に中御座之間北御庭惣絵をトレースしていますが、最初に作られた島の状況が1石なのか、いくつかの石なのかかわからない。でもこの範囲がかつての最初の庭があったときの図であろうとして、石OAやOBについてそれらしい石が置かれていたと思われます。さらには、この中御座之間北御庭惣絵の中に描かれている主だった石、例えば石6や石9についてもそれらしき石の描き方をしていることが思われました。また、過年度の委託で復元図案を市で描いていただいた経緯がありますが、その際大きな石の上に燈籠がドカンと載るのはないだろう、という皆さんのご意見がありました。実際、尾二ノ丸御庭之図を見ると、御城御庭絵図より小振りです。しかし、まわりの石組の表情が豊かに積まれているといったらいいのでしょうか、おそらくそのあたりは、溪流のような、池のほうに注ぐ感じの形態をとっていたのではないかと思います。御城御庭絵図を見ても、そこあたりは少し白っぽくなっています。それが、洲浜状といいますか、砂利が撒かれたりした部分ではないかと思えます。ある意味では、枯れの流れが池に注ぐという、代表的な例からすると玄宮園の事例で、流れが橋の下をくぐって池に注ぐのとよく似た構想と考えられます。そのようなことで、溪流ということからすると、むしろそのようなものを表現しているのだらうなどと想像しました。</p> <p>そして、雪見燈籠についてです。本来なら雪見燈籠は水辺が置かれるのがセオリーです。ちょっとした丘の上、山の上にある例もないわけではないです。修学院離宮の山燈籠が事例です。実はこの地方で、同じような事例をつい最近見えています。それは近代の町家の庭ですが、山の上っぽいところ、中腹くらいのところ、石の上に山燈籠が載っかってあるのを見て、名古屋城と同じことをやってように思われました。御城御庭絵図のような大きな石組に燈籠をのせる形態は、尾二ノ丸御庭之図のような実際に施工していく段階で、もっと表情豊かな世界をつくる形に</p>

変更されていったのではないかなという気がします。設計時は理想的な姿を描かれていると思いますが、実際に施工するともう少し小さな石を使ったり、表情豊かな石組に変わっていったりする傾向がありますので、計画と竣工との折衷的なものとして今回の石組の姿を案としました。

そのうえで、2つの絵図を参考にしながら、桃取石を中心にして、候補になりそうな石の、いわゆる顔になるところを全部スケッチし、それを切り抜いて、パズルのように石組をしてみました。日本庭園の石組は、立体といいながら実は平坦な形で、それが重ね合わされて、レリーフ状に組んでいく、それが日本庭園の組み方です。そのように並べていくと、比較的絵図に近い、例えば、資料の4で石9は、設計図と言われている御城御庭絵図ではドスンという描き方をされていますが、実際に施工のときの図とされる尾二ノ丸御庭之図では、もう少したおやかにする、左のほうへなびく描き方をされています。そのような石が時折これらの絵図で見られますので、石9のところにもっていきました。石の癖というのでしょうか、そういうものを組み合わせるといことをしました。

この中で一つ問題は、特に4の図の中で言えば石7からOBの間のところ、絵図では間延びした感じですので、OBとOAの間にはめていくにしては、ちょっと長すぎます。それと、OAと石3の間が、絵図では石組がほとんど描かれていません。どうしてかという、大きな松があったので、それをよけてというのでしょうか、それを土留め変わりに使って、次の石を組んでいく形にしています。実際にはなくてもよいのですが、今の段階では、ここは土留めをする必要があります。その背中の部分で石5、石6とあります。これが比較的法面が急峻な部分なので、そこに石組をせざるを得ない。今回の場合、石1になっているところに松があり、代わりの土留めが必要になるので、石2、石3でつないで、石7へもって行く。石10には背の高い石が双方に描かれているので、そういうものを立て、さらには石9につないでいく。この後の部分は、尾二ノ丸御庭之図に近い形になっています。

燈籠をのせる石にしても、御城御庭絵図では大きな石になっています。実際に1個でドスンとのせるとしたら、大きな石を組みますが、それに該当する石が、候補の中で1石だけありました。過年度の委託での復元図案よりも大きいかもしれないくらいです。尾二ノ丸御庭之図ではもっとまわりに石があって、その中に組み込まれていて、場合によっては脚も、2つの石にまたいでのせてあるのではないかとと思われる部分もあります。燈籠の大きさを見ていくと、御城御庭絵図では1.5mくらいの笠に、尾二ノ丸御庭之図では1.2mくらいの笠になってくるだろうと思います。実際、笠の大きさで燈籠の値段が随分変わってきます。1石でこういうものは造りますので、安いからという意味ではありませんが、こじんまりしたほうが、この石組の中では比較的自然に見えるのではないかと、収まりがいいのではないかと、という印象は持ちました。あとはとにかく候補となる石をいろいろ組み合わせました。結果として、今皆さんがご覧になっている石組が、現在ある材料からすると、一番近いものではないかと思っています。ただ、絵図の解釈の仕方で随分変わってきますので、皆さんの忌憚のない意見をお聞きしたいと思います。

とにかく絵図と異なってくる部分が、OAと石7の間のところ、それが、絵図をどう解釈すべきかという部分でもあるかと思っています。いずれにしても、既存の石OBとOAの間が、絵図でいえば半分以上占め

	<p>ています。しかし、現実にははるかに距離感がないといえますか。</p> <p>また、整備案でのもう一つの問題ですが、沢飛石と半島状地形の部分があまりにも接近していることを勘案すると、付近の石組をくっつけて据えなければいけません。絵図の表現も植栽を入れて曖昧にしている感じがしますが、そういう形にしないことには、法面がきつく土留めができないと思います。絵図とは少し違いますが、石が接近して大きな石が並んでいく、もしくは重ねられていく、という状況が現実に即した石組という印象をもっています。</p> <p>さまざまな要因はありますが、結果として、こういう形になっています。園路を造っていくと、今回はそこまできちんと描いていませんが、半島状地形部分から沢飛石まで下りていく、その間の法面が大変きつくなります。絵図を見ていると、手前のほうに土留の石を据えなければいけない。整備案では描いていますが、石を並べて留めないことには、多分園路が滑ってしまうだろうという感じがします。そういう整備が必要になるだろうと考えています。</p> <p>ご意見をいただければと思います。</p>
事務局	<p>本件については、園路の検討、資料1の1から3までのご意見と、それを踏まえたうえでの整備案、資料1の4へのご意見をいただければと思います。</p>
丸山座長	<p>野村さんいろいろ描いていただいて、ありがとうございます。</p>
丸山座長	<p>全体整備検討会議に向けて、園路を決めた論理性を言わないといけない。今回は、過去の発掘の結果と絵図はあくまで参考であって、それに基づいて発掘を行った。発掘調査結果、そういう客観的なもので園路の経路を決めたということを、言っていかなければいけないです。我々もそうです。</p> <p>もう一つ気になっていたのは、尾二之丸御庭之図です。発掘調査結果では橋脚が4本あり、絵図では6本ある。そのため、この絵図もあまり現実に対応していないと思われますので、尾二之丸御庭之図も御城御庭絵図もそれぞれ同じように考えないといけないのかと思いました。</p> <p>そして、園路の検討についてですが、急峻なところは、どう考えても、殿様がこのようなところに行くとはとても思えないのです。また、本来は石Bの上のルートかもしれませんが、石Bをもし動かすのであれば、根拠が必要だと思います。そうすると、迂回する、とりあえず園路は案3'を考えるのが良いかと思いました。そして、野村さんが言われたように、後ろの急峻な地形をどう押さえるのかというのが課題です。表面的にどうみせるのかは説明していただきましたが、中でかなりの石で留めておかないといけないと思います。それは埋めて見えなくなると思いますが、山の傾斜を安定させなければいけないということがあり、そういう見えない石が必要になるので、石の確保が必要です。</p> <p>それと、野村さんが言われましたが、重要な石をまず据えていかなければいけないです。その石はどれにするのかを決めていただいているから、それでやっていったらいいと思います。</p> <p>もう一つ気になっているのが、雪見燈籠です。これは、私はサイズが大きいと思います。なぜかという、大名庭園でいろいろな人を案内したときに、小さな雪見燈籠ではだめだということも経験上感じているの</p>

	<p>で、燈籠制作をされている詳しい方と相談して考えてほしいです。</p> <p>今回は、全体整備検討会議に向けては、論理性が大丈夫かというところがありますが、園路の考え方はいかがですか。</p>
事務局	<p>園路遺構の確認はできていなくて、今回調査した石の背面や、過去に調査した石の南側のほうの、園路遺構で判断するということとはできない。</p>
丸山座長	<p>わからないということではなく、検討してこれが推定されるということかと思えます。発掘は可能な限り実施し、絵図と発掘の成果とあわせて園路はこう推定したということが必要です。</p> <p>例えば、石Bを迂回させるのは、文化財として根拠もなく動かさないため、石Bの上を通っている可能性はあるけれども、迂回して南を通るということかと思えます。</p>
事務局	<p>今回の調査で、石Aと石Dが動いていないという判断をしました。また石Bが動いているという判断をしました。石Dが動いていないとなると、南側を通る案を考古学的には想定しています。ただ、案1の石の北側を通るルートについても、石Dが少し埋まっている可能性を否定できるものではないので、案としては案1と案3'が残ると考えています。</p>
丸山座長	<p>庭園部会としては、案を絞っていく段階だと思っています。例えば、案1はものすごく急で、大名がそこを歩いていくということは、不自然だと思えます。急峻ということは、園路を決めるにあたってかなり考慮しなければいけないという話をしてもらったほうがいいと思います。</p> <p>もちろん、石が留まっているのは、さっき土留の話がありましたが、土を押さえるための石ではないかという解釈があると思います。発掘の成果と絵図とをあわせて、こういう経路が妥当という論理にしてもらいたいです。</p>
事務局	<p>そのところで、今の説明で、少なくとも石Aと石Dは近世の土の中に埋まっているので、これは動かない。普通に考えて石Dが動いていないとすると、案1のルートは可能性が低いとは思いますが。</p> <p>ただ、本来の近世面が、本来にあったのか確定できていないので、石Dがある程度まで埋まっていた可能性が若干残るのかなと思っています。そうすると石Dを乗り越えるためには、相当盛土して上がっていくことになります。ただ園路として通れなくして、こっちは無理です、という否定はなかなか難しいです。若干急峻になるのは事実です。そこが発掘調査の成果から、石Dがかなり埋まっていたという前提であれば、北側を通っていくルートもあり得るのかな、というところまでで、今回の調査成果のまとめが終わっています。</p> <p>今日は、先生方にまずそこを認めていただいたうえで、どちらが妥当なのかという判断をしなければいけないのかな、と思ったところです。</p>
丸山座長	<p>実現していくうえでは、どちらかに決めなければいけない。もし発掘の成果で、案1で乗り越えていく可能性があれば、それなりの造成、今後のこの地形を盛土していかないといけない。その辺りの判断は、</p>

	我々もそうです。発掘調査の成果から2案考えられるため、どちらかなということで今日決められればと思います。
丸山座長	庭園部会で議論して決めていかないと、次の段階に進めないと思っています。次の段階は、野村さんにやっていただいた整備案です。その石の組み方の考え方も、論理的に言わないといけない。絵図から重要な石を判断してその間を石組していくということを決めていくということかと思っています。
仲副座長	事実関係で確認したいことがあります但よろしいですか。
丸山座長	はい、どうぞ。
仲副座長	発掘調査の資料で、結果的に、石Aは江戸期に据えられたものというのは、発掘調査の結果ははっきり言えるということですよ。石Bの見解はどこに書かれていますか。
事務局	参考資料に記載しました。
仲副座長	遺構図がありますが、遺構図の番号3の土層は、いつの土層ですか。
事務局	番号3の時期がわからなくて、当時の調査担当に確認したところでは、近代のものではないかという話でした。
仲副座長	番号3が近代ということですか。何か遺物が混ざっているのですか。
事務局	そこまで聞き取りができていません。
仲副座長	番号4は、いつですか。
事務局	番号4は近世です。
仲副座長	番号4が近世。石Bは番号3の土層を掘って据えられているという意味ですか。
事務局	石Bについては、明確な掘方が過去に確認されているということではないです。
仲副座長	石Bは今回、背面だけ掘ったのでしたでしょうか。
事務局	石Bについては、背面も掘っていないで、現状で石Bの東が断面になっているので、ここをきれいにして精査しました。
仲副座長	盛土の断面を見ているわけですね。
事務局	写真のこの黒っぽい土の層が番号1です。

仲副座長	それが番号1。攪乱ですね。
事務局	ここが攪乱で、ここが番号2です。この辺りが番号3です。
丸山座長	番号3の層の上に石Bがあるという解釈ですか。
事務局	そうです。
丸山座長	そう意味で、ここは動いているという意味ですね。
栗野構成員	動いているというか、近世ではなかったという意味ですね。
事務局	近世ではないです。
栗野構成員	近世では存在しなかった。
丸山座長	石Aはどうなるのですか。石Aは、近世で動いていないということですか。
事務局	参考資料の写真となります。
仲副座長	石Aと石Bは、近世層を掘り込んで、そこに据えられている。
丸山座長	いや、違いました。石Dはいかがですか。
事務局	今のところの断面では判断ができていなくて、今回、反対側を掘ったところが、石Bと石Aのところですか。 これが石Aと、これが石Bで、写真の左側が石Dです。
仲副座長	それは、掘方はないのですね。
事務局	掘方は、写真では見えにくいですが、下のほうにあって、この辺りの下の層の土が、もしかすると文政期の可能性があるかと考えています。その土を掘り込んで、石Dと石Aが据えられていると考えました。
仲副座長	近世層も分層できるのですか。
事務局	はい。写真では大まかに描いておりますが、近世層の中で、またさらに分層ができますので、ここで掘り込んで据えられていると考えました。
仲副座長	その掘り込みが、どこから始まっているかが重要です。近世の中でも。
事務局	そうです。その掘り込みが、近世以前の可能性がある層の、調査区1に似た、灰色っぽい砂質土を掘り込んで据えられています。
仲副座長	切り込みを開始した層はどこからですか。現代ではないですよ。

事務局	現代ではないです。近世です。
栗野構成員	写真で、解釈が2つできると思います。今の分層だと近世の層を石Aが切り込んでいるという見方もできるし、近世の層に石Aが切り込んで現代層がバックしたという見方もできる。また、近代から石Aが切り込んでいるようにも見えます。
仲副座長	そこをはっきりさせておかないといけません。近世層を切り込んでいるからといって、原位置を保っているとはいえないですから。
事務局	現地で分層線を引いてあるので、それを見ながらご説明したいと思います。
仲副座長	結果をいってもらわないと、議論ができません。近世が分層されていて、近世の中でこの石を据えた痕跡を確認した、ということによろしいですね。
事務局	ただ、上に近代があるわけではないので、どこから掘り始めかは確定できません。あれだけ近世層で直接バックされているので、近世にあったらという判断です。
栗野構成員	掘方がないから近世層だということですか。
事務局	現代層から上には、掘方が当然ないです。本来なら、近代層があるとすると、どこが境目というのが決めやすいと思います。上がないので、この上の近代層から掘っていないという証拠はありません。私が現場で見たときは、近世層の中ほどから線が引いてあったような気がします。現代層直下の近世層からではなくて、もう一層下からです。この辺りから下に、掘方があるという判断をしました。そうすると、近世の上のほうは掘方がない、ということは言えると思います。
丸山座長	参考資料の図では、石AもBも江戸期ではない番号2の層の上に乗っていることになります。
仲副座長	これは平成28年度の図なので、今回の調査成果は反映されていないですね。
事務局	これは反映されていないです。
仲副座長	それは誤解を与えるので、関係のない部分はトーンを変えとか、石Bだけを見せるとかが良いと思います。
丸山座長	この図は、石Aが近世ではないと誤解されると思います。
事務局	これは、番号2の層に石Aが埋まっていることを表現しました。これが見通しの線が描いてあるのではないかと思います。番号2の上端のラインです。今、写真で見る限り、番号2の層にAが埋まっているわけではないのではないかと見えます。

仲副座長	説明上、順番を変えたほうが良いと思います。
栗野構成員	この石Aは、新しい石ということですね。
丸山座長	新しい層に、上についているようにみえます。
仲副座長	調査前は、石Aは半分くらい埋められていたということで、いつ据えられているのかというのを確認するのに、調査をした。そうしたところ、近世の土層内で据え付けられていることが判明した。ということですね。
丸山座長	平成28年度の図を入れると混乱すると思います。
事務局	石Bと番号2の層の関係に限定するということではいかがでしょうか。
栗野構成員	トリミングする等があると思います。
丸山座長	論理的に、わかりやすい説明をお願いしたいです。 石Bについては、近世に据えられた石ではないと判断したのは、それでいいと思います。 事実は明らかにし、総合的に判断してルートを推定していただきたいです。
仲副座長	園路の遺構がないとのことでした。舗装園路や石敷きの園路等だと遺構で確認できますが、地道の場合は、明確な遺構はもともとないと思います。石組と石組の間に余地があったら、余地の中でどこを通過していたのかを判断していくのが、動線の推定というか、それが園路という解釈になると思います。
事務局	踏み固まった遺構は、あまり見つからないですか。
仲副座長	それはあります。
栗野構成員	締まりの位置づけはありますね。
仲副座長	締まり具合とか、ここだけ硬いな、とかですね。
丸山座長	もう一つは、桂離宮等事例では白砂を撒きます。だから白砂の層が少しでもあれば、そこは園路となります。天皇等偉い方が来た時には、園路に白砂が撒かれています。
仲副座長	白砂はいかがですか。
事務局	でていないです。
丸山座長	今、仲先生が言われたように、園路をどう判断するかは、石と石の間しかないということですね。

仲副座長	近世もいくつか分層されるとすると、近世の時期のある時期の表土、地表面と推定されるところが、ある程度平坦を保っていれば、そこがある時期の園路であった可能性が高くなります。それはいかがですか。
事務局	平坦層はありますが、その土が、すごく粘質で、締まりがありません。
仲副座長	腐食がかんでいるとかはないですか。そういうのはないとすると分解している可能性もあるのか。
丸山座長	これだけのものなら全部分解しますから、それはないと思われます。ただ、今言われた園路が絵図にあって、石組があって、その間は人が通れる空間が園路であるということでしょうか。園路の発掘成果は難しいかもしれませんね。
事務局	調査区の近世の上面も、その下の層が分かるところも、当時の上面は保っていないで、それぞれ削平を受けた状態で、たまたまそこで線を引いているのではないかと、見たところでは、そう感じました。
野村オブザーバー	かなり改変されていますので、表土はとられてしまったのではないかとと思われます。遺構がでてこないのは、そういうことではないかと思ひます。
仲副座長	今回、観覧動線を設定し、石組がない余地の部分について発掘調査で明らかにして、絵図を見ながら余地の範囲内で、適切なルートを設定する。そのような考えと思ひます。
丸山座長	今回検討しているエリアの東側には築山がたくさんあります。そのエリアを整備する際、庭園部会としては、絵図を一つの拠りどころにすることを想定します。高さ関係は必ず問われると思ひます。これは推定とせざるを得ません。絵図だけでなく、今回の野村さんにやってもらったようなことや類例の調査もやらなければいけないと思ひます。発掘調査で遺構が検出されなければ、推定でそれなりに造形、造っていかなければならぬと思ひます。
仲副座長	発掘してでてきたものは、遺構保存して、潜在化して復元整備する。なかった場合でも、名勝名古屋城二之丸庭園整備計画では、近世から近代の歴史的経緯をふまえた庭園の再生が基本方針になっており、回遊式庭園として整備するために園路をつないでいかないといけない。そういう動線整備の中で、絵図を踏まえていくと、石や植栽のない余地の間の中で園路を設定して、合理的な園路整備をやっていくということだと思ひます。
丸山座長	もう一度、そういうことを言って事業を進めないといけぬと思ひます。
仲副座長	それは、余芳の整備事業にも引用されて、基本方針として載せられているので、直近の全体整備検討会議等で配られているかと思ひます。

丸山座長	余芳について関連するところはありませんが、庭園全体についてはだいぶ時間が経過していますので再度説明したほうが良いと思います。
事務局	仲先生のご指摘のとおり、庭園全体として、絵図と現地の調査を、どういう方針で採用していくのか、という全体方針を、それは先生方にずっとご協力いただいて昨年度策定した整備計画に述べています。余芳の資料では、そこから引用する形で使っています。当然、庭園部分のこれから行っていく復元についても、同じ考え方を基本線にして行っているということを、あらためてご説明していかなければならないかと思っています。
仲副座長	権現山については、近代に大きく削平された部分を盛土復元しており、3分の2くらいがすでに終わっていて、この先は今回の北園池の整備とあわせながら、もう一度盛土をすることとなると思います。今回行う動線の北側の石組は、丸山先生が言われたように、築山の南の端を留める石列になるところに動線が入ってくるのが絵図から見えます。絵図に描かれている中に、今回の調査で、石A等も非常に精度高く推定されるものが位置づけられた、ということですから、それをキーにしながら復元設計案をつくらなければならない。という順番で説明されるのがよいのではないかと思います。 築山の残りの掘削部分の復元盛土は令和6年度から行うのでしょうか。
事務局	今回の検討内容の工事後にと思っています。
仲副座長	それで結構です。そのあと一体となっていくので。ラインは以前の復元のときに設定していなかったですか。
丸山座長	裾がわからないということではないです。
事務局	仲先生のおっしゃる築山とは、今回行う石組の背面のところですか。
仲副座長	そのとおりで、権現山のところです。
事務局	権現山の裾の部分ですね。
仲副座長	そうです。そこは、石組の整備をしないとできないからということで、以前の復元整備のときに止めていたのですよね。
丸山座長	そうです。今回ようやく裾を決めることとなります。
事務局	大型土嚢を外して石組を造るということです。
丸山座長	それともう一つは、アジア大会でまでにその辺りを全部観られるようにしておかないとだめという話もあると思いますが。
事務局	一定の観られる状態にはしたいです。

丸山座長	大型土嚢があるままでは駄目ですから。
事務局	調査、整備の真最中です、という見せ方もあるとは思いますが、とはいえ、大型土嚢はさすがにとりたいたいです。
丸山座長	名古屋市としては、それに合わせる必要はあるのではないかと考えているということで、裾の部分の施工は、それほど時間はかからないと思われます。野村さん、あれは3週間もあればできますよね。
野村オブザーバー	そうですね。
丸山座長	石さえあれば、わりと早くできると思われます。大型土嚢は全部外せると、私は思っています。その下のほうは、残るかもしれないですが、今回の検討の石組ができれば、かなり観られる状況になると思います。
事務局	そういう意味合いでは、丸山先生が言われていたように、現地で石等をおある程度選びながら組んでいくということも必要であることは理解しています。ただ、資料化して、現状変更申請が必要になるため、野村先生にご協力いただき、スケッチを描いていただき、この方向性で許可がいただけるということであれば、現場では、必要に応じて少し入れ替えるということかと思います。
丸山座長	確かに書類は必要となりますね。
事務局	書類として、先ほどから先生が言われる論理的にという、筋をとおした資料で認めていただかないことには、現場での工夫にたどり着けないと思います。
仲副座長	ところで、参考資料の石の写真は、同じ石を違う方面から見ているのですか。
事務局	現時点での候補として挙げさせていただいており、角度を変える等した複数の写真を掲載しています。
仲副座長	絵図で見合わせて、おおよその大きさを割り出して並べてみると、石の数も姿も、ほぼぴったり合うということですね。
野村オブザーバー	だいたい員数はこれで、ほぼぴったりかと思います。
丸山座長	見える石組としては、これでいいと思いますが、見えないところに石がたくさん必要だと思います。
野村オブザーバー	そのとおりだと思います。丸山先生のご指摘のとおり、背中のところ隠して石を据える。それは、見え方を考える必要がないため、城内にある石の中から選ぶことができます。御城御庭絵図の中にも、背中のほうに石が描かれています。そういうものを足していけば、土がある程度留められと思います。

丸山座長	大きい石を据えるには、飼石が必要です。最低3個。それを据えて上にのせる。そういう裏方の役割の石が結構な数必要です。
事務局	角度を調整したりするための、介添えのような石のことですか。
丸山座長	それが飼石です。
野村オブザーバー	かませ石とも言います。一つ景色で裾のところ、例えば、景色で流れをつくっていくというか。整備案は今のところ骨格の部分を示しています。それで済めばいいですが、そうでない場合には、小さな介添えの石を入れるということです。
事務局	今は、主役の部分だけ示しているということですね。
事務局	資料の中で、飼石については文章で触れられればと思います。
丸山座長	それでよいと思います。
野村オブザーバー	幸いにして、今城内で確保してある石が、それを補うのだろうという期待感があります。
仲副座長	野村先生が描かれた整備案について、石Bは、どういう扱いで描かれているのですか。
野村オブザーバー	石Bを動かさないという方向で考えています。
仲副座長	整備案では、石Bはどこになりますか。
野村オブザーバー	これが石Bです。
仲副座長	挟んで描いてあるこちらですね。
野村オブザーバー	はい。土留側の石組だけここに描いています。この石は既存の石です。
仲副座長	野村先生の整備案は、園路の復元案でいくと、案1で描いていただいているということですね。
野村オブザーバー	そうでないと、半島状地形の東側に植栽等をする余裕がまったくなく、御城御庭絵図と異なることになってしまいます。石Bがなくて、ここに植栽するのであれば、多少なりとも近づけるかと思しますので、本当は石Bがないほうが助かります。
仲副座長	標高が書かれていないですが、レベルとしては少し上がることになりますか。
野村オブザーバー	土留のような石がありますが、これが該当します。

事務局	石Dです。
野村オブザーバー	これは動いていないということで案をつくりました。発掘調査の最中に、描いていますので、その結果で案が変わることもあるだろうという話をしていました。
仲副座長	石Dは石段にみたいになるわけですか。
野村オブザーバー	場合によっては、その前に一つステップを置いて、乗り越えてもらう形になるかもしれません。
事務局	Dの石の天端を階段の1段みたいに捉えてということですね。
野村オブザーバー	ルートの西側のほうは、スロープになり、石D付近はもっと急になるわけです。ですから、この辺りに土留をしなければならないな、ということになります。
仲副座長	わかりました。
丸山座長	石A、石C、石Bが混乱しますね。
事務局	野村先生が描かれた時点は、発掘調査の最中であり、石Aや石Dが動いていないという判断があまりできていないところがありました。石Aも石Dも動いていないという前提で案1のルートとすると、ある程度石Dを埋めて段差を解消するしかないのかなという状況です。園路の検証の結果で2案となり、南側を通っていくのが妥当かと思いますが、案1の北側があり得るとしたら石Dを埋めるという、そういう議論です。
栗野構成員	なるほど。
丸山座長	それは現場へ行って確認する必要があると思います。
事務局	石Dを埋めるという案が成り立つのかどうかというのが、私もあまり自信がないです。
仲副座長	石Aと石Dは近世のもので、石Bは近世より後かもしれないという説明がありましたが、資料の4整備案では、石Aから石Dを現在の位置とすると踏まえて、とあるので、この間の説明が少し飛んでいると思われました。
事務局	野村先生にご説明した時点で、石Dが動いていないということを調査で確認しきれていませんでした。逆に、石Aと石Dの北側を回っていくルートをとろうとすると、石Dをある程度埋めること可能になると今考えています。
仲副座長	ここにレベルの表記をして、どれくらいの勾配になるのか、ということですね。

事務局	現地を見ていただいて、どのくらいなのかを御覧いただければと思います。
仲副座長	あと1点です。さきほど、丸山先生から雪見燈籠について、大名だから大きな雪見燈籠を据えて権威を示すといった話があったかと思います。そういったことは、時代からいうと、文化・文政期にありましたか。
丸山座長	文化・文政期くらいでしたらあったと思われます。
仲副座長	雪見燈籠というのは、わりと遅れて造られたもので、泉涌寺が最初ですかね。
野村オブザーバー	この辺りでは、泉涌寺、孤篷庵、そのあとに桂離宮。その辺りが古いタイプです。
仲副座長	そのあたりの雪見燈籠は、だいたい小さいです。
丸山座長	ただ、尾張はだいたい大きいという認識です。
野村オブザーバー	絵図から、茶室との間の尺を勘案し、縮尺をあわせてみました。そうすると、御城御庭絵図の場合は、笠がだいたい1.5mくらいの直径です。
仲副座長	笠の大きさですよ。
野村オブザーバー	はい。尾二ノ丸御庭之図は、だいたい1.2mくらいのサイズだと思います。
丸山座長	そうですね。この絵図でみてもやはりこの雪見燈籠は目立ちます。やはり、ある程度大きさを考えないといけないです。
野村オブザーバー	1.5mから1.2mくらいまではあるだろうな、という印象はもちました。
栗野構成員	平山勝蔵が雪見燈籠の論文を書いていますので、そういう資料を確認して検討したほうがいいと思います。
丸山座長	以前に、燈籠制作をされる詳しい方から大きいものだと聞いています。
仲副座長	1mくらいなのですね。大正時代くらいだったら、もっと大きいものがありますよね。
栗野構成員	1.8mとか2m超えとかの事例があります。
仲副座長	名古屋城二之丸庭園の場合、2mは超えないのではないのかなと思いました。
丸山座長	ここは、大名庭園であり、藩主が小さいものではすまない気がします。

	桂離宮は、公家文化ですし。
仲副座長	わかりました。最大でも、基本的には勸修寺くらいですよ。
野村オブザーバー	最大で勸修寺でしょうね。あれは結構大きいですから。
丸山座長	大きいですよ。
仲副座長	時代からいうと、それくらいはありますよ。
野村オブザーバー	1.5mまであるかどうかは、わかりません。
仲副座長	そのくらいでしたよ。
栗野構成員	基礎を造っている脚のものは結構大きくなりますが、3脚で雪見型の組み合わせでやっているものは、あまり大きくできないと思います。
仲副座長	笠は大きいですよ。
栗野構成員	はい。そうですね。だいたい1.5、6ぐらいだと思います。
丸山座長	考えられるところの一番大きいくらいのものでどうかと思います。
仲副座長	桂離宮くらいだったらいいのかもしれないです。
野村オブザーバー	一つ参考になるのは、形は少し違いますが、名古屋の事例で、揚輝荘に山燈籠があります。これは修学院離宮の山燈籠の写しのような感じです。あそこの庭が修学院離宮の写しだと言われている説がありますので。
丸山座長	屋根のある橋、白雲郷もそうですね。修学院離宮の写しだと言われているんですよ。
野村オブザーバー	それも修学院離宮の写しです。ですから、揚輝荘も一つ大きさとしての参考になります。
丸山座長	ここでは、燈籠等のサイズをあらかじめ決めておかないといけない。
野村オブザーバー	これはある程度決めておいて検討を進めないといけません。整備案では台石になりますがサイズが想定できておらず、のらないという懸念もあったものですから、その場合は2石を使って、またぐような形で置けばいいだろうと考えました。3本脚だったら安定はします。1本は隠れたところでまたいでいても、それは構わないのではないかと考えています。
丸山座長	1石では無理だと思います。据えるのが大変ですし、2石、場合によっては3石でもいいと思います。

野村オブザーバー	先ほど想定したサイズの燈籠をのせる巨大な石を据えると、全体のバランスが合わなくなります。比較的にじんまりした感じで、尾二ノ丸御庭之図のような感じかと思います。
丸山座長	台石も大きいものがほしいですが、なかなか手に入りませんので、組み合わせてやらざるを得ないです。 ただ、野村さんが言われたように、一番重要なところは大きいものが収まらないといけないかと思います。
野村オブザーバー	御城御庭絵図に描かれている燈籠の台石は大きく、尾二ノ丸御庭之図は一回り小さくしています。それが現実だったのだろうなと思います。
事務局	脚は3本ですか。
野村オブザーバー	3本の可能性があります。
丸山座長	3本でしょう。
野村オブザーバー	3本ないし、4本の可能性もあると思います。これは組み立て式のもので、芝離宮の事例があります。
栗野構成員	平山勝三の雪見燈籠形態的特徴についてという論文がありますが、J-Stageに掲載されていますので参考にされるとよいと思います。
野村オブザーバー	兼六園も組み立て式だと思います。
丸山座長	燈籠制作をされる詳しい方が組み立て式で脚が3本と言っていましたよね。
事務局	ネット検索でみると、笠の大きさは、そんなに大きくはなく、縦には長いです。
野村オブザーバー	背が高いです。
栗野構成員	東京の事例では、組み立て式の3脚雪見型があるのは芝離宮、新宿御苑と、小石川後樂園の中の中島の中にもありますね。
野村オブザーバー	そういえば、ありましたね。
栗野構成員	城郭庭園での3脚の雪見型の類例があればいいと思います。
丸山座長	そういうものから、ここのサイズを決めないといけません。
野村オブザーバー	3脚ですからコンパクトに、台石もそんなに大きくなくても据わる感じですよ。
丸山座長	ばらして持ってこられるから、楽です。
野村オブザーバー	愛知万博の庭で設置したものは2mくらいの大きさだったと思います

	<p>が、組み立て式なので運べました。クレーンが入れない状況だったもの ですから。</p>
事務局	<p>整備計画にある第1次工事区域について、公開できるようにするため には、まだ検討及び施工する内容は非常にたくさんありますが、スケジ ュールを立てて計画的に進めていきたいと思います。またご相談させて いただきたいと思います。本日予定していた議事は以上となります。引 き続き、お時間をいただけたら、現地のほうでご指導をいただきたいと 思いますのでよろしくお願いたします。</p>